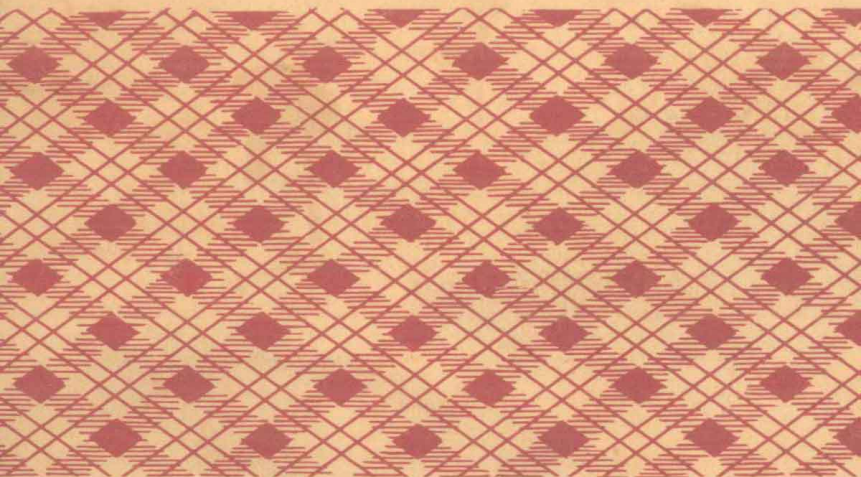


三 等 高 校 生

赤 松 光 夫



*AKIMOTO BUNKO

秋元文庫

三 等 高 校 生

昭和 48 年 10 月 31 日 第 1 刷発行

昭和 49 年 9 月 30 日 第 4 刷発行



定価はカバーに表示してあります。

■著者紹介

赤 松 光 夫

(あかまつみつお)

昭和 6 年徳島県生まれ

京都大学文学部卒業

主なる作品

「まあ失礼ね」

「初恋実験中」

「ミステーク時代」

「ハートでアタック」

「われら劣等生」

他多数

現住所

東京都狛江市和泉 763

著 者 ■ 赤 松 光 夫

発 行 者 ■ 秋 元 英 子

発 行 所 ■ 株式 秋 元 書 房
会 社

〒 162 東京都新宿区赤城下町42

電話 東京(268)0758(代)

振替 東京 2 7 0 4 7

乱丁、落丁本はお取替えいたします。

印刷=暁印刷 製本=大和工業

© MITSUO AKAMATSU 1973

0193-B-004-0029

秋元文庫

三 等 高 校 生

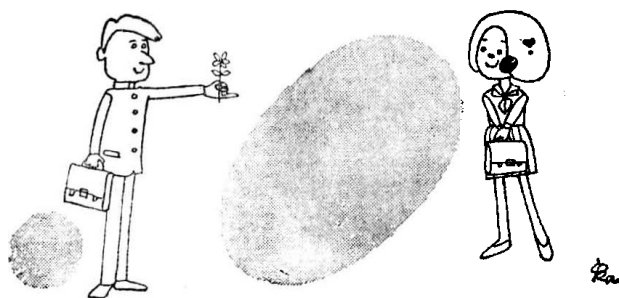
赤松光夫著



秋 元 書 房

目次

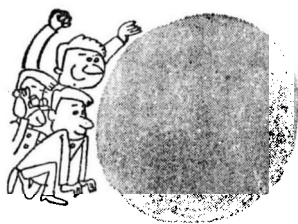
美しい隣人	7
ラブ・ハンター	20
メッセンジャー・ボーイ	29
誘惑者	45
お礼参り	54
謎の関係	70
決闘	90
復讐戦	110
ランデブー	134
あいつと私	145
ゴキブリ退治	162



脅迫する彼女
恋は山登り
最後の歌

さし絵
金子勝治

192 182 174



三等高校生



主要人物

杉田純一——霞ヶ丘高校三年生。霞ヶ丘団地に住んでいる。東大志望。天文学、地球物理学にこつていて哲人ぶりであるが、その実は俗っぽい。

水谷みどり——純一の隣の部屋に越してきた美人。高校を二年ばかり前に卒業して、現在は霞ヶ丘高校の校門前にある「さつき文房具店」に勤めている。

水谷梨枝——みどりの妹。霞ヶ丘高校の二年に転入してくる。

丸顔で色黒く、明るい感じだが、頭がよくて成績優秀である。菊地重吉先生——ガンマー星人というあだ名の数学の先生。背がひよろたかく、独身で物わかりがいい。風変わりなところがあるが生徒間では人気がある。

山川良子先生——二十九才の国語の先生。菊地先生に好意をいだいていることは、学校内では公然の秘密。

園池信二、高木良夫——純一の親友。お人好しだが、頭は弱い方。

美しい隣人

一

春霞に曇った山脈の見える霞ヶ丘団地。

睡くなるような四月のある土曜日の午後である。

学校から帰って来たばかりの杉田純一は、自分の部屋の中央にごろりと横になって、天井を見上げていた。

自分の部屋といっても、四帖半、玄関を入るとダイニングキッチンがあり、つぎに六帖の居間、それに四帖半の部屋がつづくごくありふれた団地住宅の規格品である。

父は会社、母は彼が学校から帰るなり、親戚の家へ出かけて、純一は留守番を仰せつかった。

だがそれは、彼にとってこの上もなく好都合であった。なぜなら彼は友人の園池信二や高木良夫を家に来るよう呼んであったからだ。

彼の部屋には椅子つきの勉強机があり、その横には本棚があったが、どういうわけか、学校の参考書より哲学書だの、天文学、S・F小説、地球物理学といった少々風変わりな本ばかりがぎ

っしりとつまっていた。

本から観察すれば、科学者か哲人ばりのところがうかがわれる。たしかにのっぽで、ひょろひょろとした青白い顔、少々栄養不良気味のところまではそれ相応なのだが、純一の内心はそれに反しやや俗っぽい。

その一例をあげてみよう。

一週間ばかり前に、彼の部屋のすぐ隣、四一三号室に引越して来た美しい水谷姉妹に、純一はもうその日から浮き浮きと心を寄せていた。そして、その二人の姉妹をこっそり拝見させることを約束して、今日、園池に高木という悪童どもをわざわざ家に呼んだのであった。

彼はすでに、姉のみどりは、高校を二年ばかり前に出て、純一の通っている霞ヶ丘高校の校門前にある「さつき文房具店」に勤めるようになり、妹の梨枝の方は霞ヶ丘高校の二年生に転校して来たことを知っていた。

彼女たちは二人きりの家族である。

「で、お母さんは……」

「はあ、父と母は静岡の方にいるんです。父は医者ですが、近く東京の病院に勤めることになっています。でも、まだ今勤めている病院の方の都合がつかないものですから、ひとまず先に私もがこの団地に引越して来ました。ですから母が、ときどきこちらにまいることになっています」引越しの挨拶に来たみどりが、母にそんなことをいってるのを純一は隣の部屋でこっそり聞いた。

なんでも、彼女たちの移転は医者である父親が、近々に静岡の病院をやめて、東京から私鉄で一時間もかからぬ、この新興の町に来る予定であり、それでひとまず子供たちを先に引越させたというのが、真相らしかった。

「でも、遊んでいてもつままないから、知人の紹介で、高等学校前の文房具店で働くことにしたのです」

みどりは、楽しみに母にそう話していた。

二

純一はなおも天井を見あげて、甘い空想にふけていた。

なぜなら、みどりこそ彼のイメージにびつたりの女性であったからだ。

年令こそ二つばかり上ではあるが、その細面のとりすました白い顔、きりつとした黒い眉、純一の心をいっぺんに降参させるような香気が彼女にはただよっている。

あれから毎日、朝夕彼女と顔を合わすのを純一は楽しみにしていた。

「よう、オス——」そういって、彼の夢想を打ち破り、園池と高木がノックもせずにはドアをあけ、つかつかと玄関に入ってきたと、両親がいやしないかとはばかりように部屋中を見回した。

彼等は目下、受験勉強の真最中であるが、土曜日だけは自由なレジャーの時間にしていたのだ。「いいものを見せてやるといったが、一体なんだね。だいたい純のヤツのことだから、とんでもないものだと思って期待もしていないがね」

大人のいないのに安心したのか、園池はそういつて純一の部屋に入るなりニヤニヤした。

「宇宙人を見たとかなんとかいい出すんじゃないかな」

太っちょの高木もいった。

最近の純一は、天文学やS・F・人工衛星の研究にこり出していたからである。

「ところがその通りなんだ。今日はすごい宇宙人を見せてやろうと思ってる」

ゆっくりと起きあがりながら、純一がいった。

二人は顔を見合せて、ヘラヘラ笑っている。笑っているながらも、彼等も少々純一の最近の傾向を心配していたのである。

S・F小説の読みすぎか、純一の頭の方もだいぶ宇宙化しているらしいからだった。

「それもいいけどよ。高校三年生だからな、それに君はわれわれのホープなんだぞ。少しは身を入れて受験勉強でも始めたかと思ったら相変わらずだな」

彼の本棚を見回しながらメガネをかけた秀才づらの園池がいった。

「お前たちは俗物だぜ。宇宙のことを考えると、受験なんてちゃんちゃらおかしくてね。それに^{とし}年令の一つや二つ上だってこともちっともおかしくないよ」

純一は妙なことをつい口にすべらせて、思わず顔を赤らめた。だが、園池や高木には、彼がみどりのことを考え混乱した結果だなどということはわからずもなかった。

「ところで、その宇宙人の写真でもとったというのかい」

腰をおろしながら高木がいった。

「いやとんでもない。だけどそのベランダに出てみろよ。一時間もじっとして青空を見上げていると現われるんだ……」

「本当かね」

「本当だとも」

二人は馬鹿馬鹿しいといったげに顔を見あわせた。

「じゃ、早速見せようじゃないか。こんなところにいてもしかたがないよ。さあ、ベランダに出てみよう」

純一はまっ先になって出た。その態度があまりにもまともなので、二人もちょっと半信半疑な表情になった。

ベランダには、テーブルとトウ椅子が置かれてあった。三人は思い思いにその椅子に腰をおろした。

ベランダは隣の部屋と共通のものである。

四階のこのアパートのベランダからは、遠く春霞のたなびく山脈が眺められるし、箱庭のように色とりどりの美しい周辺の住宅が眺められた。

晴れた日には、富士はもちろん、箱根の山々から秩父連山がくっきりと浮かび出す。

「まさにすばらしい眺めだ。しかし、宇宙人がこの青空にぼっかり浮かぶとはどうも考えられないな。また変なことをたくらんでいるんじゃないか」

園池が疑わしげな眼で純一を見返えた。

純一はニタニタしながら、ちょっと隣の部屋の方に氣をとられていた視線をかえすと、園池の方に顔をまともに向け、思わずカラセキをした。

「もう少しの辛抱さ……」

すでに、みどりの妹の梨枝は部屋に帰って来ている。純一の思惑では、そのうち、つまらぬことを大声でしゃべっていれば、きっと二人がベランダに顔を出すだろうという計算であった。

「おい、大変だ、あそこ火事だぜ！」

その時、高木がすっとんきょうな声をあげて、はるかかなたを指さした。

青空に氣をとられていた園池も純一も、思わずその方に目をやった。

「どこだ！」

園池がいった。

高木の指さす向こうを見ると、遠くかなたの丘陵の蔭から白い煙が立ちのぼっている。

だがそれはよく見ると野火であった。その瞬間、純一はこの彼等の発見を最大限に利用してやれと考えた。

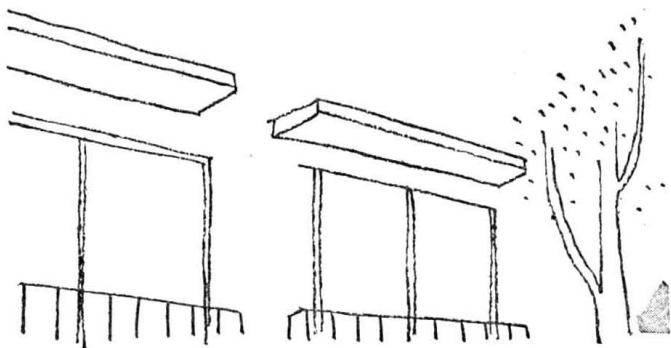
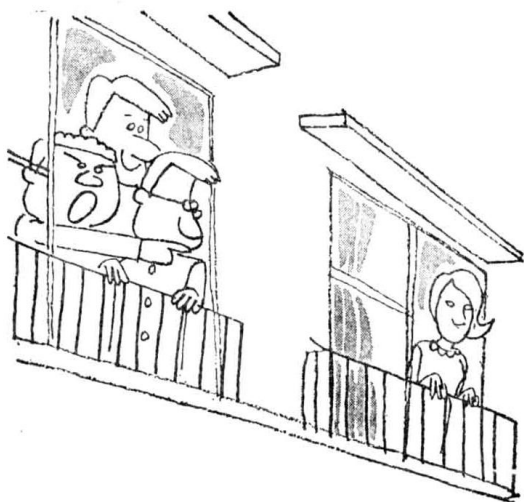
「ほんとだ、火事かもしれんぞ」

一段と声をはりあげて純一はいった。

彼の思惑は見事に当たった。

「火事ってどこ——」

うろたえた声とともに、ガラス戸をあけ顔を出したのはみどりである。



三人は、思わずその方に今度は視線を集めた。

「いえ、その……」

純一はあわてて、顔を赤らめ、口のあたりをおおいながら、

「あ、あれですよ」

とみどりに指さした。

「ああ、あれなの、あれは火事じゃないわ。ただの野火よ。びっくりさせるわね。火事だなんて——」

しかしその時には、園池も高木も、みどりの顔をぼかんと眺めてもう火事には関心がないという表情をしていた。

「あら、お友だちなね」

今度は、みどりが、そんな悪童どもに気づいて、あわててニッコリと笑った。

「ええ、面白いやつなんです。紹介します。ひまだったら一緒にトランプでもしませんか」

純一はすかさずいった。

園池と高木はあっけにとられてみどりを見上げ、それからベコリと頭を下げた。

純一は高木と園池にチラッと目くばせして、ヘスゲエ美人だろう〜というふうに合図した。

「御迷惑じゃない？ だったら退屈しているところだから……」

そういつてみどりは、にこやかなほほえみを見せた。

園池と高木は思わず立ち上がり、あがり気味に、

「ぼく、園池です」

「高木です」

とあらたまって頭を下げた。

「トランプでしたら、梨枝もいいかしら」

みどりは妹のことも考えてそういった。

「ええ、いいですとも」

純一はますます浮き浮きしていった。

「梨枝ちゃんもいらっしゃい。来る時椅子を持ってね」

みどりは部屋の中に呼びかけた。

「なによ——」

そういいながら、花模様のブラウスに黒のスラックスをはいた梨枝が姿を現わした。

彼女はまだおかつぱ頭である。三人はそのくりくりとした梨枝の瞳と視線を合わせるや、また
ももじもししながら立ち上がった。

「妹の梨枝です。皆さんと同じ高校ですが、学年は一年下ですの……」

「よろしく」

神妙に梨枝は頭を下げて、自分の持ってきた椅子に腰をおろした。

梨枝はどちらかというと、姉とは逆で、丸顔で色も黒く明るい感じの小柄な少女である。

純一はすぐトランプを持って来たが、園池や高木が妙な顔をしているので、彼等にちよつと目